

月の
輪
廻

1

輪廻^{りんね}の視線はますます険悪に、鋭くとがってゆくばかりだ。

便所へ行くときに、腹ん中、ふかふか言う音を聞いたのだろう。飲み過ぎよ、と文句を言われる。

新大久保にある居酒屋の、クソ汚え共用トイレはウサギ穴のようにせまく、おっさんのウンコの臭いが染みついて息を吸えば吸うほど身体の中に汚染物質が溜まっていく感じがする。落書きだらけの壁。色褪せた「世界一周旅行」のポスター。黄色く乾いた床のタイルに干からびたゴキブリの死骸がひっくりかえっている。

おいおい、ここは牢屋の中か？

正直、便座に腰かけるのも嫌なんだけど、一度下腹を緩めると薄い色の尿が出てくるわ、出てくるわ……飲み過ぎたあとの排泄のさなかに湧きあがるエクスタ

シーに何か呼び名はあるのだろうか。

二十秒ほど目を閉じて、今日飲んだ酒の量を数える。ビール三杯、日本酒一合、ウイスキーの水割り二杯……片手を少し超えるくらいだ。「ふつう」の範囲内だろう。たぶん。

個室に戻ると、輪廻が緑茶を飲んでいた。

「ラストオーダーだつて」

呼び出しボタンを押しかけたあたしを制するように、ジョッキになみなみ注がれたウーロン茶を押しつける。

「ビール腹。おしっこしても凹まないね」

「輪廻のおっぱいとおんなじだ」

「わたしの胸にはビールなんて入っていません」

……それは、ブラックジョークか？

輪廻はケラケラと笑っている。メロンなりに大きな胸がワンピースの下で揺れる。首の下までしっかりとボタンを留めたロリータ趣味の清楚な服。それなのにみだらな女のおいがする。触れば胞子を吹く毒キノコのように、やわらかなおっぱいから漂ってくる魔性の芳香。

どんな男も、彼女を抱きたくてたまらない……。

「また触って、何回目？」

「おっぱいに触れていないと死んじゃう病気」

「自分のがあるでしょ」

「輪廻が良いの。世界中で輪廻がいちばん」

他愛ないじゃれ合いがいつまでも続きそうに思えたとき、彼女の顔の陰影が変わった。こほん、と小さな咳をして唇をぬぐう。ゆっくり席を立つ。通路の途中で大きくよろける。

怯えた仔犬のような目。

まんげ

「満月……」

甘いアルコールの息の中に、わずかな血のにおいが混ざっている。胸元のボタンを外して、レースの施されたキャミソールへ手を滑り込ませると、ばんばんに腫れあがった胸がブラジャーから飛び出していた。

ああ、始まっている。

勘定を支払い、彼女の肩を抱いて走った。終電はとうに過ぎているが、駅前のロータリーにタクシーが

停まっているはずだ。輪廻は耐えきれずに口から液体を吐き出した。さきほど飲んでいた緑茶がアスファルトに大きな染みを作る。

吐いたのは水。でも、油断はできない。

タクシーに揺られている間、彼女は窓ガラスに額を押し付け、外の景色を見て気を紛らわせているようだった。しかし車が西新宿へ続く緩やかな傾斜を駆け下りたとき、唇から唾液とは違うどろりとしたものが零れ落ちた。口をふさいでも強烈な臭気はごまかせない。

フロントミラーに映る運転手と目が合う。白髪のみまじった太い眉の下で、訝しげな目が探るようにあたしたちを睨んでいる。

「厄介事は御免だぞ」

年老いた目がそう言っている。

「こっちは自分のことで精いっぱいなんだ」

「誰が男に頼るか、ぼけっ！」

鏡越しに睨み返した。

マンシヨンの近くに車をつけてもらうと、負傷した兵士をかばうように輪廻の肩を支えながら車を下りた。

汗で湿った前髪の隙間から、ライトアップされた新宿の高層ビルが見える。屹立した黒いシルエット。無数に空いた窓の目が物言わずこちらを見つめている。何かに対して毒づきたくなる衝動を抑えて、蛍光灯の切れかけた廊下を進む。

ドアを開けると真つ先に飛び込んでくるサーモン・ピンクの壁。

あたしたちのねぐらはデザイナーズマンション崩れの、不思議な形をしている。五メートルある異様に長い廊下を抜けるとキッチン付きのリビングがあり、メインルームの両脇に二つの部屋——寝室と物置に使っている部屋がある。リビングの外にはバルコニーが二つ。カーブを描いて左右の部屋と接するように細い道が続いている。个性的で暮らしにくい構造だが、そのおかげで立地の割に家賃が安い。

入口の敷居につまづいて玄関に倒れ込む。衝撃で吐き出される。びちびちと、胃の腑からせり上がってくるような、おびただしい量の血液。彼女のフリフリした洋服が隅々まで赤く染まる。どんなに汚れた便所

でさえ嗅いだ事のないすさまじい悪臭。

スプラッター映画もここまで過度な演出はしない。血糊だつて量を使えば嘘つぼく見える。けれどもこれは現実なのだ。月に一度、大量の血を吐いても死なない人間が現実にいる。

そしてそういう人間は、現実に認められていない。洗面所からポリバケツを持つてくる。バケツに向かってゲロゲロ吐き続ける輪廻の背中をさすってあげる。

玄関は殺人現場のようなありさまだ。雑巾を持ってきて、床に浮いた血を吸わせる。洗面所ですすいで、また血を吸わせる。そのように玄関と洗面所を何往復かしたのち、乾いたタオルで残りを拭いた。凝固する前だったのでほとんどの血は拭きとれたが、タイルの隙間に沁み込んだ一ヶ所だけ、不自然な格子縞を残した。

この家には輪廻が作りだした幾何学的な染みがたくさんある。

「気分は？」

「うん」

「うん？」

「口の中、気持ち悪い」

「風呂場まで行ける？」

「うん」

洋服の上からシャワーをかけると、血まみれ殺人犯の女が元の可憐な輪廻に戻った。

毎月のことなので、むせ返るような血腥ちなまじささにも慣

れたものだが、あいにく今夜はコンディションが悪い。ビール味の胃液が早くも逆流しかけている。シャワーヘッドを輪廻に預けて、夜風へ当たりて外へ出た。

我慢ならない吐き気を紛らわすため、メンソール煙草に火をつける。煙草は唯一の治療法。気分転換、ストレス解消、精神高揚、気力回復。とにかく元気になる！ときはセーラム・アラスカに火をつける。輪廻は極端に煙草を嫌うが、今日くらいは大目に見てくれるだろう。

心地よい清涼感にうっとりしていると、ふと誰か

の視線を感じた。バルコニーから身を乗り出して辺りを見回しているうちに、胸のざわめくその視線が七メートル下から向けられていることに気がついた。超新星爆発のように強い光を放つ自販機に照らされて、真っ白な女の顔がくつきりと浮かび上がる。

危うく、口から煙草を落としそうになった。

吸殻をもみ消して、まじまじとその顔を見つめる。鏡の反射かと思うくらい似ている。

風呂場でシャワーを浴びている草薙輪廻くさなぎりんねの顔に。

そっくりだった。

「煙草、身体に悪いわよう！」

女は叫んだ。輪廻の声で。自販機の陰で手を振りながら女は笑った。生ぬるい夏風に吹かれて、真っ直ぐに切り揃えられた前髪がさらさらと揺れた。間違いなく、彼女は輪廻だった。あたしの恋人・草薙輪廻。

自販機に背を向け、勇気を振り絞って呼びかける。

「輪廻！」

「なあゝに？」

「輪廻！ 草薙輪廻！」

「なによーう、何かよろ〜？」

間延びした声にエコーが掛っている。シャワーの流れる音もする。これも間違いない、輪廻は家にいる。

再び目下を見下ろすと、女は姿を消していた。

——瞼の裏側に、昨日見た夢の残骸が残っていた。内容は忘れてしまったが、一つだけはっきりした感情を覚えてる。

「嬉しい。輪廻が帰って来てくれて嬉しい。」

……やれやれ、夢の中のあたしは馬鹿と名がつくほど正直者だ。

ここ数ヶ月、輪廻は出張や研修で家を空けることが多かった。生活時間が噛み合わず、あたしたちは同じベッドで眠ることもなかったのだ（ああ、セックスしたかった！）。昨晚、居酒屋に誘ったのも、輪廻を酔わせていちやつきまくる算段、だったのになあ……。

あたしの涙ぐましい努力も知らず、隣では甘いびきをかいて恋人が眠っている。一度深い眠りに入る

と、彼女は中々目覚めない。犯しちゃうぞと思いながら、紫色のキャミソールから突き出たおっぱいをつつく。

彼女はうんうん唸った後で、

「ありがとう」

わけの分からない寝言を言った。

二度寝しようと思ったが寝返りを打つばかりで眠れず、仕方ないので身体を起こした。八月三日午前六時三十一分。キャビネットの上のデジタル時計が光っている。

あたしの仕事は十時から、彼女は今日明日と非番らしい。輪廻の仕事はLCCの乗務員で、週末という概念がない代わりに休日が不定期にやってくる。疲れ果てた恋人を起こさないよう、そっとベッドから滑り降りた。夏といえども早朝は肌寒い。ジーンズに足を通すと腿のあたりがキリリと冷えて、すぐさま両手の摩擦熱で温めた。網戸を開け、バルコニーへ出る。青紫色に染まった空の彼方に朝日が昇り始めている。「ヘイ・ジュード」を口ずさみながら、セーラム・ア

ラスカに火をつける。

冷たい煙を三口ほど肺に流し込んだところで、ほんのりした浮遊感に包まれる。ああ、これこれ。この恍惚。「薔薇色の人生」。そんな言葉が浮かんだが、あたしたちの人生は一つの色に染まれるほど単純にできていない。

清々しい気持ちの裏で、底知れない不安と焦りがじわじわと心を蝕んでいる。洗面台の前に立つとその気持ちはどうしようもないほどの重みを持ってずっしりと両肩にのしかかる。いつだってそうだ。どんなに美しい空の色も、この顔を前にするとすっかり色褪せてしまう。

カラス色の髪の毛。

悪魔じみた浅黒い皮膚。

凹凸の深い顔に、紅色の目。

日本人離れした異端のかんばせは、母親譲りのもの。

幼いころ、目が覚めたらごく平均的な日本人女児の顔にすり変わっていないかと夢見ていたものだった。

鏡よ、鏡。

あたしを、日本人の女の子にしてください。

年を取っても代わり映えない姿に嫌気がさし始めたころ、力任せに両頬を叩くと心がすつと晴れるような、爽快な気持ちになることに気がついた。

真っ赤に染まった頬がじんじん痛んで、今日もやってしまったと気づく。これも自傷のうちに入るのだろうか。

痛む頬をさすりながら言い聞かす。

落ち着け。

思い出せ。

お前は誰だ？

「あたしの名前は、坂下満月。さかしたまんげつ二十五歳と三ヶ月」

あと二年くらい、生きていたい。

月の輪廻

2016年6月18日・19日福岡ポエイチ

より販売開始°

・A5サイズ　・111ページ　・価格400円

あらすじ

25歳の坂下満月は同性の恋人・輪廻と暮らしている°

輪廻は胸に子宮を持つ奇病に犯された女の子°

彼女との関係がぎくしゃくする中、輪廻とそっくりの顔を

持つ輪廻子が満月の前に現れて・・・・・・・・°

作・天野 蒼

表紙写真・兎澤 との